

ハンドボール競技における

両ウイングポジションでの1対1の突破プレーに関する研究

横野 祐太朗 (201012073、ハンドボールコーチング論)

指導教員：山田 永子、會田 宏、藤本 元

キーワード：フェイント、ウイングポジション

【目的】

ハンドボールにおいて、1対1の突破技術は自己または味方のシュートチャンスを作り出すことができ、ポジションに関わらず重要な技術である。しかし、ウイングポジションにおける1対1の突破プレーに関する研究は少ない。そこで本研究では、両ウイングポジションにおける1対1の突破動作に着目し、ウイングポジションにおける突破プレーにおける特徴を明らかにすること、また本研究の結果から実践現場への提言を得ることを目的とする。

【方法】

平成22年度から平成25年度までの関東学連の春季リーグ34試合、秋季リーグ戦36試合の計70試合を対象とした。評本のプレーは、レフトウイング（以下LW）122プレー、ライトウイング（以下RW）左利き78プレー、RW右利き52プレーの計252プレーである。

分析項目：「ボール保持前」局面①動きだしの有無、②ディフェンス（以下DF）との位置関係、③ポジション取り、④DFのけん制の有無、「ボール保持」局面①DFとの位置関係、②フェイントの種類、③DFの高さ、④DFシステム、⑤対峙しているDFと隣のDFとの距離、⑥対峙しているDFの隣のDFの高さ、⑦DFとの距離、⑧突破方向、⑨ドリブル、⑩歩数、「結果」局面①有効、②無効

【結果】

本研究の結果以下の通りにまとめられる。

(1) ウイングポジションにおける1対1は、有効なプレー結果となることが有意に多いことが認められた。

(2) ウイングポジションにおける1対1は、トップスピードでDFの準備が整う前の瞬間的なイン方向への突破を多く試みる傾向にある。

(3) ウイングポジションの1対1において、対峙しているDFと隣のDFとの距離が遠距離である場合に、有効なプレー結果につながる傾向にある。

(4) ウイングポジションにおける1対1では、アウト方向への突破と有効なプレー結果との間に有意な関係が認められた（表1）。

【考察】

アウト方向への突破が有効な理由として、対峙しているDFのアウト側にはDFが存在せず、DFのフォローがないために、シュート達成することが多いことが考えられる。LW及びRW右利きは、3歩またノーマルINでイン方向へ突破を試み、無効となることが多く、RW左利きもその傾向が見られた。これらのことから、DFはイン方向の突破が多いことを予測してイン方向の突破への対応を準備しているが、アウト方向に対する予測や準備をしていないと考えられる。このことは、LW・RW左利きの2歩での非利き手側突破が多く、また有効につながることも分かり、瞬時にイン方向からアウト方向への突破に変化することでシュート達成できると考えられる。

【実践現場への提言】

ウイングポジションにおける1対1の突破プレーにおいて対峙しているDFを突破するために、以下の3点を実践現場に提言できる。

(1) 対峙しているDFと隣のDFとの距離が遠距離の時、積極的に1対1をしかけるとよい。

(2) DFを突破するにはDFの状況に応じて、イン方向からアウト方向に突破方向を瞬時に変化させることがよい。

(3) DFを突破するには9mより上にポジションをとり、間合いをはかりながらDFにイン方向への突破を意識させた上でのアウトへの突破がよい。

表1 突破方向とプレー結果との関係(%)

	LW		RW左利き		RW右利き	
	有効	無効	有効	無効	有効	無効
利き手側	52.7 †	77.4 *	48.2 †	72.7 *	42.4	26.3
非利き手側	47.3 *	22.6 †	51.8 *	27.3 †	57.6	73.7

*: 残差分析の結果有意に大きい †: 残差分析の結果有意に小さい p<0.05